

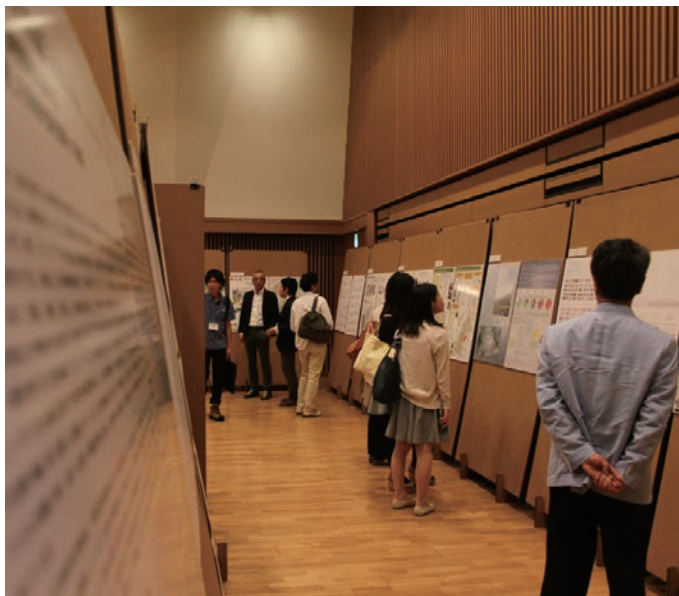
団地再編 COMPETITION2013

パネルディスカッションによる二次公開審査

KSDP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

MARCH 2015
VOL. 158



二次公開審査会の様子（左：作品展示会／右：作品発表・プレゼンテーション）



二次公開審査会の様子（左：審査会／右：表彰式）

■団地再編 COMPETITION 二次公開審査会の開催

関西大学KSDP団地再編プロジェクトでは、社会情勢の変化に伴い人口減少の様相を呈している、大都市郊外のさらに縁辺部に位置するニュータウンであるUR南花台団地（大阪府河内長野市）を提案の舞台として、現在の建物ストックを極力利用しながら、「団地全体の仕組みの再編、その結果としての空間の再編、新たな暮らしの提案」をテーマとした団地再編に対するアイデアを「団地再編 COMPETITION 2013」として募集した。

提出作品 23 作品のうち、一次審査会（2014 年 3 月 13 日）にて上位通過 8 作品を選定し、その後、二次公開審査会（2014 年 5 月 25 日）にて一次審査通過者による作品発表及び質疑応答、発表者と審査委員による公開ディスカッションがおこなわれ、各賞の受賞者を決定した。

本リーフレットは、二次公開審査での公開ディスカッションにおける発表者および審査委員の発言、質疑応答の内容について記録し、とりまとめたものである。

司会 公開審査に先立ちまして、先ほどのプレゼンテーション及び質疑の内容から各審査員が採点した一次投票の結果を公表いたします。その結果を受けましてこの公開審査会を進めて参りたいと思います。パネルディスカッション及び追加の質問をうけて、再投票をさせていただきます。その合計得点が最も高かったものが最優秀という形になります。それでは江川先生お願いいたします。

江川 それでは、もう一度提案していただいた8人の方にお揃いになられていますので、質疑でも良いし、なぜこれが良いと思ったかを順番に、角野さんからお願いします。

角野 私自身の根拠を先に申し上げます、団地の再生というのは、極めて困難である事はみなさん共有されていると思いますけれども、そういうなかで一つはいかに混在させていくか、スムーズな混在を作り出す事ができるか、混在というのはもちろん用途の混在、それから住居タイプの混在。いかに混ぜ合わせる事ができるかという視点と、もう一つは団地単体ではなかなか生き残れないところが出てきますので、広域な中での団地のポジショニング、できればそこが周辺郊外圏も含めた拠点になり得るかどうか。という視点となりますとやはりセンター地区のあり方というものが重要なと思っています。その2点についてどのように触れられているのかという事を中心に、とりあえず第一段階の評価をさせていただきます。

沿道側にどのような広域集客機能

て触れていらっしゃったのが、最初の方の一つの広場に企業を埋めていきましようというタイプのものと、沿道に積極的に商業を誘致していきましようという案と、それから老人ホームを計画するというその3つについて注目をしていたということですから。

江川 榊井さん、河内長野市としてはどんな感じですか。

榊井 はい。一番最後のものを3点というように評価させていただきました。

河内長野市は、こういう形のニュータウンと言うんですか、昭和40年代後半くらいから開発された団地が非常に多い場所です。特に三日市から南花台、大矢船、南ヶ丘と、その奥にバスは繋がってないんですが、北青葉、南青葉と大きなニュータウンがございます。特にそのなかで一番元気な団地が南花台なのかなと思っています。コノミヤというスーパーがありまして、医療機関が多い、飲食街もあります、美容院などもありまして、河内長野の南の中心になってる場所かなと、そこでも人口が減ってきている。そこで何か起こしていかなあかん、というのが今回のコンペやと思うんです。

最後の135番、大矢船、南ヶ丘に触れて頂きまして、それと言葉ですね。今、河内長野の人口が減っているだとか、非常に厳しい状態なんですけれども、「暮らしの誇りと絆」特に「誇り」という言葉がすごく頭に残ったフレーズなんです。地元と一緒に。どうしても提案というのは

上から下へというかな、住人に対して「こんなこと考えたんで、これで。」という感じになるんですけども、意思決定は住民主体だよと、住民の意見を聞きながら、住民が実際に自分で考えて進んでいったとしたら、そこに生まれてくるのは「誇り」であるし、住民がものを考えるということで「絆」というものが生まれるので、特に言葉にまず惹かれたという一つです。

それと『ダンチモリ』というのも非常に言葉が良かったなと思います。団地レンジャーという位置づけを聞かせて頂いていたのと、2020年、それと2050数年ですかだんだんと落ちていく、落ちていくだけじゃないんでしょうけど、ソフトランディングというんですか、僕はよく言葉として使うんですけども、無理矢理保つ、無理矢理上げるんでは無しに、じわっと落ち着いていつてどこかで安定したところを見つけて、そこで継続して続けていくのもありなのかなと。『ダンチモリ』のコンセプトを聞いている時にこういう風に森と融合していつてというのもすごく感じたところです。そんなかたちで評価させていただきました。以上です。

飯田 なかなか建築と違って難しいなと思いました。立てたビジョンみたいなものがあって、それがどんな風に展開されていくかというのが割とわかりやすいものが僕の評価の高い順です。

『ダンチモリ』というのは、この団地が作られる前の地形から始まって里山再生というのをどんな風に考



審査委員 江川直樹氏



審査委員 角野幸博氏



審査委員 榊井繁春氏

えていくのかって言うのが非常に豊かなイメージが働いたんじゃないかと思います。ダンチモリという言葉がどうかというのがあるとしても、エリアマネジメントの1つの方向性というのが非常にはっきりしていたという風に思います。それから116番の方は、家族型シェアハウスというですね、これは団地という一つのある意味では行き詰まった住戸タイプというのが再生するイメージというのが、これはこれで非常にはっきりしていたと思うんですね。もちろん外の話とかは色々抜けてはいましたけれど、そこに特化して、つまりこの団地をああいう形で一つの新しい時代の住戸タイプに改造する事によって生きながらえるというメッセージは非常にはっきりとしていたように思いました。で、この二つが一緒になったら良いんじゃないかなと(笑)というのが正直なところですね。

重村先生と三好先生はやっぱり非常にいろんなところの押さえが素晴らしいと思いました。重村先生のところでやっぱり気になったところがゾーニングなんですね、何で道路で切られていかなきゃいけないだろうかと僕は気になりました。むしろ例えば、住宅地に向かって縦に一つの領域ができていとか沿道に対して一つの領域ができていというもうちょっと違うゾーニングというのがここではリアリティがあるのではないかと思ったんです。それが2点にさせて頂いた理由です。それから三好先生のも非常にわかりやすく、真ん中のセンターが活気づく、あるいは一つのキッカケができればこの

団地だけじゃなくて周辺全体が生き残れていくっていうメッセージが強くありましたけれども、やっぱり具体的にどうしたら良いのかって言うところがもう少し知りたかったなあという風に思います。

前半の4人の方はそれなりの個性はもちろんありましたし、それから読み取れるものもありましたし、ただやはり非常に断片的なものにとどまったというような気がします。その断片がもしかしたら他のものを担っていく断片になるのかもしれませんが、一つの提案としてはちょっと物足りないという感じがしました。中でも最初の20番の方は、僕はこの絵はなかなかすばらしいと思うんですけど、今ひとつ焦点が合わないように感じるんですね。それでこのスタディがもうちょっと先ほどの『ダンチモリ』のような1つのビジョンにもっと繋がっていくようなプレゼンテーションであったならば良かったのかもしれないと思いますが、そこまで自分の理解が及ばなかったというのがあります。以上です。

忽那 まず皆さん、お疲れ様でした。コンペというものは出す側の方が私は多いものですから、その苦労は非常にわかることがありますので、今日話を聞かせていただいておりますと、ありがとうございますと言いたいです。出す側の視点で言うところのコンペが何を狙っているのかが決まらなと、何を選んで良いのかよくわからないところがありまして、私は団地再生とか、建替えのことも含めてというところ

で環境デザインあるいはコミュニティデザインに関わっているのそういう視点で見たつもりではいます。その時に団地の再生をするにしても何にしても、やっぱりその場所ですとずっと住み続けてきた人が何を信じて生きてきて、我々にしても成長する木を見て「自分の今までの人生を振り返れるんです、この木を見たら」という、そういうところで守れるものは守っていく。その所に少し新しい人たちがその環境資産を使って違うライフスタイルであるとか、使いこなす方を変えていくとか、そういう工夫をしながら生きていくというものとも接点を持たないと結局ダメなんだろうなと。今を救うという事と次の使いこなすとかみたいな話がそこに定着するかというようなものがすごく重要な視点かなと言う風に考えました。

私としてはコンペということで、先ほど一番最後に三好さんのおっしゃっていた出前とかも含めて、こういうコンペで議論された事が、河内長野市さんとかURさんとかに、仕組みとして作るだけでなく、それを運用する資金にまわすとか、立ち上げの時期にどんだけ人の話をきいてちょっとしたお金があれば、本当に運用できるチャンスがあるのにその仕組みが無さ過ぎるという事がありますので、そういう事が実現したらいいなという風に思います。ですので、コンペですので少し大胆に提案してこれからの関わりかたに示唆をあたえるそういうようなものが良いなと思いながら選ばせて頂きました。

97番のはゾーニングについては賛否両論あるのかとは思いますが、私は住まい方についてテーマを与えている。それこそ専門家が与えるということではなくて議論しながらという事だと思いますが、キャラクターをはっきりさせた暮らし方、ライフスタイルに多様性を求められていて、その受け皿が無いという風な



審査委員 飯田善彦氏



審査委員 忽那裕樹氏

事は非常に若者が思っているところを良く聞きます。さっきの『ダンチモリ』の話もそういうテーマがあれば環境再生を含めて関わっていける示唆を与えている。この実現性をどうするかという話は所属を見ると、是非実現してほしいと思いますが、なかなか難しいところもありますが、先ほどちょっと審査員のなかでしゃべってたんですけども、結構郊外とか農村とか含めて若い人たちがそこに住むということに抵抗がなくなっている時期かとも思っています。今までは「そういう暮らしもあるよね」と言っていて、でも、「なかなか難しいね。働き方が。」という風になっていたのですが、ネットの話なんかも含めて充実してきて実際移り住んで定住してくとかそういう人がかなり増えてきているし、そういう仕組みをちゃんと作れば、大胆だなあと思っていたものが本当に実現すると思います。そういう意味で94番と111番を読まさせていただきました。116番と135番に対してはいまからすぐ仕事になるんじゃないのかというレベルなのでそういうものを選ぶのかどうかというと、コンペなので選ばして頂いたという感じです。

鳴海 本当にみなさま、お疲れ様です。今日はいろんなアイデアを聞かせて頂いて、図面だけ見るのではなく、説明を聞いてどこに思いがあったかということがよくわかってよかったと思います。忽那さんがおっしゃった様にどういうものを選んだら良いのかについて我々もまだ合意してませんので、この場で合意ができて選ばれるんじゃないかと思っています。

私の考え方を申し上げますと、今日本の人口が減って高齢者が増えて地域を作っていくエネルギーが低下している時代です。例えば40年前に僕はある県の県営団地に住んでいたのですが、当時は皆さんが

提案したような光景がありました。それからここ2～3年、社会主義国の団地が経済開放後にどうなったかっていうのを調べに行きました。例えばベトナムのハノイの団地をみると皆さん多くの方が提案しているような光景があります。なぜかというところ、そういうニーズがあって、力がある。住んでる人にやっぱりエネルギーがあるから管理者が油断しているとみんなそこを使っていく訳です、管理者と交渉して使っていく。管理者も認めざるを得ないという状況がある訳です。皆さんの提案はそれぞれすごく面白いんですけども、エネルギーをどこに求めるのかという所の考えが一番大事なんじゃないかなと僕は見えています。

それで例えば一番問題は制度かもしれないですね。この公共的な団地の空間は一体誰が管理しているか、管理の仕方の問題がいろんな人のエネルギーを削いでいる可能性もあるわけです。そういう事をわれわれだけで議論してもできません。新しい空間、新しい団地空間に蘇らせていくために、今の制度が枷になっているということを、ちゃんと団地を管理している組織などに対して我々が言っていけないと思います。このような問題は日本の公共的な空間の全部にあります。人々にエネルギーがあった頃はそういう枷にみんな抵抗して、生活空間を形成してきたんだけど、エネルギーが落ちるとそういうことが起きなくなって、どんどんしぼんでいくような状況に下手するとなくなってしまう。初めのほうで地域資本主義についておっしゃった方は、そういう事に気づいており、その事を論じたいと思ったんだと思いますが、説明の時間をそれに使い過ぎたことがもったいないなと思いました。

団地だけでなく、多くの街が同じ問題を抱えている中で、団地は組織的に取り組む可能性のあるところですから、そこから生まれた取り組み

方が他の街にも影響を与えていくという可能性は十分にあると思っています。私が一番関心のあるのはそういうところですよ。

それではエネルギーは一体どこに存在するのかという事を色々と次に考えていかないと行けないんですけども、重村先生が言ったライフスタイルと言うのが本当にそういうエネルギーになるのかどうかというのをもう一度聞きたいと思います。最近田舎の方へ行って、仕事をやる若者が増えているというのは、事実だと思います。また、特別な人はそういうところでがんばっていかうという意思をもっていますが、今の普通の団地で普通に暮らしている人がどうやったらライフスタイルということでそれだけの力をまた生み出す事ができるのか、そこが十分理解できないところです。そういうところをどう評価したらいいのか迷っています。

何人かの方が新しいビジネスについて提案しています。何とかレンジャーの案ですが、そういうのが好きな人がいて、それにこだわって仕事にしていこうという考え方ですね。しばらくそれはできるかもしれないけれど、どのように継続するかが問題だと思う。難しいのは赤レンジャーですね。市長さんが赤レンジャーだったら良いのではないかと、この辺の具体的な問題はもうどうなるんだろうかというののもちょっと気になりました。

三好さんの提案ですが、老人の組織がビジネスを創造し広げていく、組織化していく、そのような会社は本当にあるのでしょうか。あったら



審査委員 鳴海邦碩氏

ちょっと紹介してもらって、それに賞を与えた方が良いかもしれない。とりあえずまた皆さんの意見を聞きながら最終的な判断をしたいと思います。

重村氏 <鳴海の質問を受け、重村氏が応える。>

ライフスタイルが場所でイメージされることってある訳ですよ。例えば湘南なんてのは典型的にそうですけど、阪神間と言われても多少はある。河内長野はあんまり知られてないけど、すごくパワーのある場所だと僕は思うんですよ。

たまたま親族がここに住んでたんですけれども、彼なんかは大阪で事業をやっていたんですね、それで大阪の事業はつぶれちゃったんですよ。僕は葬式の日始めて行って気がついたんだけどむしろ大阪の事業をつぶして河内長野の方に引っ込んでからの方が、めちゃめちゃ豊かな生活してるんですよ。空手の先生をしながら市民運動もお世話してて、1000人以上の地域住民が集まったんですよ。それで僕は河内長野すごいな、と。

それから今度このコンペの為に調査したんですけれども、市民運動みたいなものがあるかという、いっぱいあるんですよ。その中で見事に展開しているのが - 奥河内 - という、その運動ですよ。この - 奥河内 - は役所の人ややってるんだって言う人もいますけれども、でも、まちの人もいっぱいやってるんですよ。地酒屋さんもやってるし、ご飯カフェとかですね、いろんなものがあるんですよ。だからこれは大阪の南に行くと高野山突き抜けて

行く手前にこう言う緑が深くて、都心から30分以内のところで、新今宮まで20分ですからこういう元気な人たちがいて。今日でも日曜日なのにこの施設がよく使われてるでしょ。だからそういうライフスタイルがあるんで、それを励ましていくような拠点になるような団地を今再生していくチャンスじゃないかと。

もう1つ言えばですね、ダンチモリの人に僕が言いたいのは建築は50年、60年で滅びないんですよ。例えばブルーノ・タウトのブリッツ・ジードルンクとかジーマンスシュタットとか有名な団地ですよ、フランスだとフィルミニとか。ああいうところはもう何十年も建ってるけど、どんどん良くなってウェイティングリストがいっぱいいる訳ですよ。だからちゃんとそこに行くところという暮らしができる、こういう仲間ができるという事であれば生き残れると僕は思うので。それはここから言える、と思っております。

星田 <再び審査委員からのコメントに戻る>

特にテーマ設定のないコンペですから、どう選ぶのが難しいと思っておりました。私は実務家であり、複数の賃貸団地や分譲団地、民間住宅地等とお付き合いしています。これらの様々な提案を見て、実際の再生に向かってどれがどう役立っているのかはケースバイケースだと思いますので、一つの提案と団地再生の成功とは1対1の関係ではなからうということがありますね。その中で今回順位をつけるとするならば、我々審査側の選ぶ論理というか根拠が団地再生に対する世の中へのメッセージになっていくという事があると思っています。そういう意味で後悔の無いように思った事を申し上げたいと思います。

私は、手法や絵だけでなく、それを実現するための手立てを提案してほしいと思いました。手法や絵とい

うものは本屋さんに行けばかなり出尽くしている中で、なぜ本当に良いものが出来にくいのか、特にこの半世紀は一部の優れたプロジェクトはあるけれども、一般の住環境が決して良くなっているように見えないという状況があります。ですから、コンペをきっかけにそういうものをいかに超克できるか、きっかけとかテゼみたいなものがうまく表現できないかなと感じています。その一つは“認識の底盤の形成”とでも申しますか、団地にまつわる環境・社会・暮らしなどの文脈を如何に豊かに、広く創造的に読み取れるかが大切だと考えています。

例えば111番の「ダンチモリ」案。これは若い方々が元気いっぱい展開なさって、内容もとても良かったと思います。特に緑の森についての展開が美しく且つ充実していました。その中で、私が日頃感じている問題意識として、3つのエコロジー（自然・社会・人間／F.ガリ）のお話もさせて頂きましたが、オギュスタン・ベルグのように自然を人間の文化総体にしっかり引き寄せながら、ロマンチックに解釈しすぎないバランスのある捉え方が必要で、緑いっぱい綺麗だからコンペとして惹かれやすいという帰結にならないよう、これは見る側の問題として意識しました。

もう一つ135番の提案はとてもお上手にまとめられています。提案者のお考えとして、ちゃんと実現できなきゃ意味がないじゃないか、今出来ることをしっかりやらなくては、机上の話ではダメなんだというメッセージを感じます。それは真っ当ですが一方、今の社会において近



発表者 重村力氏



審査委員 星田逸郎氏

代や国家や資本主義など社会の枠組みが住環境にどういった課題を与えているかという批判的な精神をもって、それをどう超えていけるのかという認識が欲しいと思いました。行政や資本に少々疎んじられても、人間の居住に本来大切なことを、手間がかかるし制度との角逐もあるけどもこうするんだという新しい提案が必要であろう。

そういう意味で、大切なことが抜け落ちないように慎重に且つ創造的に拾い上げていく、認識の基盤を形成する事が社会的にはまず大事だと思いますし、それは社会全体でみんなで創り上げていくしかないと思います。今日はそういうところを期待したいと思っています。

江川（星田より「緑の展開を中心にする事」への指摘や、重村氏より「建築は滅びない」との指摘があったが）私は、でも 111 番は緑だけの提案ではないと思いますが何か言いたい事はありますか？

塚本氏 緑をロマンチックに解しているのではないかとこの指摘は、確かにスケッチはかなり緑を意識して描いているものだとはいえ…

星田 あまりにロマンチックで、あの、ご本人は違うと思うんだけどね。

塚本氏 あえて描いてはいないんですけども当然維持管理費がかかってきたりですとか、緑は無料で育てる事はありませんので当然苗から育てるのは時間がかかりますし、相当のコストがかかるという事は承知して

おります。ただあの絵の中に表現してますけども、今回バックグラウンド無しに緑を描いたのではなくて必ず物語とセットにして描くようにしました。そこに植える人はどういう人なのか、畑を作る人はどういう人なのか、ベランダにガーデニングな人ももしかたありますが、そこは子育てと必ずセットになっているとか、色々な緑の一つ一つに必ず暮らしがその背景にあります。その緑を管理する人であったりベンチャーであったりというような姿を位置づけながら一つ一つを考えています。なので、緑の提案と言よりも、緑を使ったこれからの団地の暮らしの提案という事で見て頂きたいというのが私たちのメッセージです。

それともう一つ。先程、建築は滅びないというご指摘があったので補足させていただきます。私たちの提案では建築を滅ぼすというようなそういった観念に立っているものではありません。70 年という風にとったのは原価償却期間を仮に置いた時に 70 年間という風にしておりますけれども、当然 RC 建築物がそれ以上耐久性を有するという例がありますのは当然認識しておりますし、住民の方々が適切な補修をすることによって長持ちすると思いますし、社会的に認められる建築物になればもっともという話もあると思います。で壊すという提案ではなくて…

星田 たっぷりと緑に包まれるぐらい長く躯体が残るというのはすばらしい事だと思います。長く残る建築というのは、強度だけじゃなくて色々な側面から人々に受け入れられる、社会的に持続していく建築であることが不可欠です。そうならば壊されなくなる。だからそういう長持ちをするためには物理的なだけでなく、社会的あるいは暮らしの視点に立った建築・空間の意味、有り様みたいなものが非常に重要だろうなという気がしました。

飯田 <星田の指摘を受け 111 番の提案に対して発言>

ちょっと援護すると。必ずしも緑と言っているよりも、むしろ歴史ですよね、ある意味では。だからそれを再生していくっていう視点があったのは、僕は偉いと思います。建築に手を入れたっていうのもそのストーリーに入ってますけども、むしろランドスケープ的じゃない所が弱いんじゃないかなと思うんですよね。なんでこういうところに椎茸工場を造らなきゃいけないのかみたいな話がね、それがもっと最初の、木 3 本の森とか守るとかって言うぐらいのストーリーの中にちゃんと展開されていけばもっと良くなったんじゃないかなと思いますけどもね。

角野 <さらに角野からも 111 番に対して発言>

私もこの提案に関してはいろいろ考えました。冒頭に申し上げたように私の評価の基本は最初の 2 点だったんですけども、それは別にして地域をしっかりと読み込み、過去の植生であったり地形を読み込んだりしてというプロセスは高く評価しています。

それからもう一つパークマネジメントとかそっちの方の勉強をだいたいされてますか？パークマネジメントのやり方、あるいは里山保全とね、そのロジックと言いますか、やり方がそのまま団地で展開するとどうなるかというようなご提案だったと思うんですよ。だからこそあえて僕は 1 点になっちゃったと思ってんですけども、それはレンジャーの問題です。ご説明の中ではレンジャーは住民がやりたい人は誰でもやれますよと、でもそれじゃあ僕はダメだと思うんですよ。やはり最初の立ち上がりの時には誰でも寄って来なさいでは無くてですね、しっかりと知識やノウハウを持ったリーダーがしっかり仕掛けていかな



発表者 塚本文氏

いと、そしてその上で住民の活動を作り出していくという仕組みが、実は僕もある公園で立ち上がりから仕組み作りのお手伝いをさせて頂いているんですが、誰でも良いですよというのはやっぱりダメだと。誰でも良いですよとちゃんとやらなければいけないんですけれども、でも本気で誰でも良いですよじゃあ大変だよ、というのが一点と。それから先ほどもおっしゃっていたように誰でもいいといった人たちが集まってきて、どこでもいい空き部屋で、何でもいいビジネスというのは、僕は極めて危険だと思いましたので申し訳ないですけれどもああいう点数を付けさせていただきました。

江川 私は、先ほど鳴海先生もおっしゃったように、やはり制度の問題が一番問題だと思っているんですね、作る時代の制度、管理しやすい制度を如何に変えていくかという事が無ければいけない。だから南花台というもののみたいにリアリティのあるところを対象にしないと意味が無いと思うのでそこで提案をお願いしている訳ですけれども、大規模な賃貸住宅が抱えている問題に対する視点が重要だなと私は思います。皆さんも同じような事をおっしゃっていますけれども、特にシェアハウスに改造するとか自分たちで改造するとか、多分今からできそうな時代になってきていると思うんですけど、そうはいってもなかなか大変で、URが持ってる制度を、個別のプロジェクトだけで変えようと思うと大変なので、それを皆さんの提案を応援しながら社会はこういう事を言ってるよと、今の人たちはこんな事を言ってるからURさんそろそろ変えた方がというか、URが単独で変えられることでも無いと思うので、やっぱり社会の賛同を得ながらじゃないとなかなか変えられないですよ、今までの制度って言うのは。でも、これからはそういう時期だと

思っているんです。これはたまたまURの団地を対象にしているからそんな話になるけれども、公的な団地はいっぱいありますから。だから、例えばURがあまり過度な負荷がするような提案は現実には無理なんじゃないかと思うんですよ。その時に、僕としてもさっき角野さんがおっしゃったように、誰でも良いとか、みんなとかは、ちょっとあり得ないと思いましたけれども、だけど空き部屋をちゃんとした責任感のある人が使わしてよと言ってですね、そこで何かちゃんと自分たちも提案するし、住民の人たちとも議論しながらやるという話は些細なところからスタートできるような気がするんですね。絵は壮大だったし何でもかんでもやりますみたいなのがあったけれども、それは、僕はあんまりそこまで…割と最初の一步を決心すれば何も作らないでできそうだなと言うところもあったので、私はそれを評価しました。

それから1番目(20番)のやつも実はロータリーとロータリーの間を歩行者天国にするのかな？あれすぐできるじゃん！と思いました。後は山本さんに任せとけば住民の人たちと一緒にやってくれてURは許可さえすればいいのかな、あとは河内長野市と話し合っちゃってちょっと社会実験やってみようよっていうところで始められるのかなと思ってですね。そのアイデアからスタートする。小さいところからスタートする。絵はいっぱい描いてありましたけれどもね。でも、あんなような事をたたき台にしながら、みんなで始めましょってところでしょ、そこは僕はあり得る話だし、私が選んだのはそういう事です。ですので、97番も135番も非常に魅力的だし、ある意味で現実かもしれないですけども、例えば不足機能を入れればそれで団地、及び団地を取り巻く地域の問題が解決するとは思えないし、住民の人たちと一緒にやるって言うの

はとても重要な視点だと思うけれども、そこに今回のもう一つ、今まで明舞で出来なかった事をもっとドラスティックに提案して頂いたら…あそこからスタートするのもかもしれませんけどもね、実際はね。

参考までに、社会的なサービスの機能みたいな事をやる福祉法人がいらないんじゃないかという話があったけれど、今まではなかなかないんですよ。でも、僕たちが関わっているある所では、行政が支援しますよと、行政が支援する変わりに運営して下さいというような支援の仕方をやろうとしていますので、できない話ではないと思います。施設を運営する医療法人だとか福祉法人が、完全に自分たちの商売だけで全部やるという方法だけじゃなくても支援の仕方が小さくて、たぶん行政にしても何にしても自らがやらなくても、いろんな人が参加してくれてできる。参加型って今よく言いますよね。いろんな事をみんな参加型でやろうよという、行政が与えるのでない、みんな参加して少ない資源を使いながら現実の社会に落としていく、そのことで住んでる人が楽しくなってきたら、やってる側にもなるだろうと。多少甘いところはあるだろうけども、レンジャーみたいな発想も。僕は彼女達がいくつか知らないけれども、少し貸すからあなた達やってみてよって言ったらやれるかもわかんないなみたいな感じで私は考えたという事です。

それから少し反省したのは116番の提案かな。確かに小さいことだし、あれは比較的すぐできるかもしれないですね。そこから徐々に変えていくって言うのが確かに重要なことだと思って。それ以外の事があまり書かれていなかったのでもういい点数がつけられなかったけれども、もし追加で点を入れられるなら追加で点を入れたいと思いました。

ざっと話をしてもらいましたけれども、何か追加はありますか？

星田 <江川の発言を受け、星田より提案>

2段階審査をする必要があるんですけども今は審査員でしゃべってしまいましたので、やはり最後に提案者の方々に今の提案に対して一言づつ何かしゃべって頂ければと思います。

<各提案者が一言ずつ発言する。>

山本氏 コンペの採点どうこうって言うのは別にして今の議論で意見を持ちましたので申し上げたいと思います。誰がどういうエネルギーをもってまちづくりをするのかという話をしたいと思うんですけども、私が今の事業に参加している経験を申し上げたのはどういう意味かといいますと、やっぱり参加してみないとわからない。僕も参加するのは邪魔くさいと思っていたんですよ、でも参加してみて真面目に議論してみると、こんな議論を市役所の人たちが出してきたものを追認ばかりしてたらあかんわと思っている訳ですよ。それで考え始めたんですけども、エネルギーを、役所とか公団もそうだと思うんですけども、住民に決定させるのが恐ろしいと思っていますよ。多分何決めるかわからないから。実際そうです。ただそれを議論できる事、住民も勉強しないと何も変わらない。ハードだけ変えても何も変わらない。

デンマークの民主主義と書いていて説明する時間がなかったんですけ

れども、デンマークがどうしてきたかと言いますと、国がやることを地方に決定権利をほとんどおろしてきました。市役所がやる事をタウンのレベルまでおろしていったんですね、そうしたら住民は身の回りの事を、責任をもって決めないと行けない立場になったんです。だから議論をちゃんとしないといけないという事を勉強していった訳です。そういった事を長い年月をかけて変えていった国です。身の回りの事を、責任を持って決めていくという事をしないといつまでたっても社会のストレスはなくならないと私は思ってるんです。だから住民にとって何がよくなるのかと質問されましたが、私は極端にいいますとそういう仕組みができるだけでハードができなくても、そっちのほうが先だと私は思います。

廣岡氏 今の話もかけてになるので、誰がどうやるのかというところを僕たちも真剣に考えていて、住民だけでやるというのはかなり危険だという風に感じています。ですので、こういった若い学生や若い建築家、大工などの作るという意味をもった人たちがまずコミュニケーションマネージャーとなって、その上で企業という他のところで経験や実績を持っている方達と一緒にハードもふくめてまちを構成していくという事がこのまちにとって大きな視点で見ても非常に良いまちを作っていくんじゃないかと思います。以上です。

大木氏 ありがとうございます。私たちが提案したのは災害の仮設住宅と食堂と銭湯を入れよう。あとはホテルを入れていたんですけども、今回、女性の審査員のかたがいらないのですが、私たち2人ともいつも自宅で仕事をしていまして、いつもテレワークで仕事をしていて、生活サイクルが実際そういう風に変わってくるなと思っていまして、例えば若年層、子育て世代というのはおそらく畑であるとか菜園があったとしても、管理していくというのはかなり難しいのではないのかと。生活者、そういった若年層も支援しようとする、どういった形がいいのか。そういう時に毎日の食事だとかお風呂だとかを補助できるというのがシステムとして団地内に備わっているのがいいんじゃないかと思い今回提案をさせて頂きました。

平野氏 階段室の提案をしたものですが、今回、審査員の方々のお話や他の提案を見ていてもランドスケープの提案ができていなかったというところが他の人と違うところで、劣っているとされているのかと感じていますが、僕自身としてはちょっとずつ衰退してきているあの団地に何か一つきっかけを与えて変えていくと言った時にランドスケープ全体をやるというイメージが全然できなかったというのが一番のところ。一カ所でも僕の提案したような階段室を作った時に話題性がつくれればというイメージからあ



発表者 山本一晃氏



発表者 廣岡周平氏



発表者 大木壮太氏

あいう提案をしたということをこの場で伝えられればと思います。

江川 それは、みんなよくわかっていると思いますよ。

重村氏 私はあそこを観察した時に空き家がどこにあるか、そこに入居の相談に来る人はどういう人かということとか、出て行く人はどんな人かなど色々な発見をしたのですが、一番思ったのは非常に健全な広い空間が緑地も駐車場も道路も含めていっぱいあったんだけど、全然使われてない。これに住民が直接関わる事ができたらどれだけ良い事が発展するだろうと。そういうきっかけを作る場を作っていくべきだと考えました。

塚本氏 私たちのチームはこの議論を始める時に、そもそも団地とは一体何で、今後どういう方向に向かっていけば良いのかという事を議論しました。極端な話、団地を全部取っ払ってしまうという事も含めての議論をしましたけれども、やっぱり一つ見つけた本質的な事として団地というのは人が集まって住むところであるという事を大事にしたいなと思いました。そのために南花台のサイトの資源を活用すればもっと面白く住むことができるだろう、面白く住むって自分たちではどうしたら良いのかなと考えたのがあの絵に現れていた暮らしの姿です。

もう一つのコンセプトは自立して

住むという事です。いろいろと緑の絵を描いていましたけれども、あの中に現れていたのは単にデコレートするだけの緑ではなく、資源を蓄えて団地に集まって生活する中で、自分たちの生活は自分たちで資源をある程度マネジメントしてやっていくという方法がこれからは必要なのではないかという観点で提案しました。結果として、その資源を使っていくという生き方がいろんなニーズが多様化している中で面白く住むという事に最終的につながっていくのではないかと、そういった意味を込めての提案でした。

安枝氏 郊外のシェア居住という事を考えた時に都心型のシェアが単身者向けで、郊外向けのシェアというのは血縁型で新しいんだという説明をしましたが、質疑応答を受けている中ですか、先生方の議論を聞いていて気がついたのは、都心型のシェアというのはフルサービスが黙ってても対価を払えば提供して頂けるようなシェアで、郊外のシェアが目指すのはむしろ自分たちがサービスを作り出して、それが結果的に家賃を安くする事に繋がったりですか、居住者が新しい物事に挑戦するようになると思うんですけども、そういうサービスを自分たちで作るといような事をしなければ基本的には郊外型のシェアというのは、たとえば血縁型のプランを作っても機能しないという事に改めて気づきました。

ただもう一つ郊外住宅というのは小さくしても意味がないなというのがありまして、家賃が結局ああいう改造をすることでかなり上がりますけれど、家賃が高いので小さな住戸を借りようという事では、結局都心より小さい住戸で郊外に住むということでは、まったく意味がなくなるというわけで、できるだけ大きい住戸を借りられるように、さらに家賃負担を軽くできるように自分たちでサービスを提供すれば安くなるという仕組みを提案するという事が私の提案の中に改めて盛り込んでいく事なのかなと改めて感じた次第でございます。

三好氏 2点ばかり。今回のコンペがどの時点ぐらいをイメージしてどういう事を競おうとしているのかということで大変悩みまして、パネルは2枚しか作れませんので、ああいう提案になった訳です。それで冒頭で言いました通り河内長野市さんは、30年後には消滅可能都市になっているんじゃないっけ？それぐらいの都市ですから、そういった中でのかという事を大変深刻に考えてやったつもりです。その中で、まず取り組める事は何か、それから熟度が出てきた時に取り組む事は何かというのあのの中に込めたつもりで読み取って頂ければ嬉しいなと思っております。

それからそういう意味では、星田さんがおっしゃったように、団地再生への試みがこれだけあちこちで行



発表者 平野有良氏



発表者 安枝英俊氏



発表者 三好庸隆氏

われていて、コンペも行われているのに、その数年後にはコンペ内容など忘れられるようなことになっているのはなぜか。そうならないようにという危機感を持って、取り組んでいるつもりです。そのようなことから、実現可能性を重視していますので、もしかするとそれがもっと現状打破を求める人には誤解を招いているのかも。そうだとすれば私の表現がちょっとまずかったかなという風に思います。

あと一点、鳴海先生がおっしゃった、エネルギーを生み出せるかどうか、そういうコーディネートをする組織が出てきているのかどうかというお話がありましたが、その所をブレイクスルーしないとダメだと思っています。エネルギーと総需要が減る中でこの南花台をどうするのかという事を今考えている訳ですね。そうするとURさんも色々な制限の中で現場を動かしておられる訳ですが、MUJI×URとかIKEA×URなどいろいろお考えになっているようですが、あれも一つはライフスタイルを変えていくという試みで、僕はまだとっかかりくらいの仕組みだと思っています。今後ハード、ソフト絡めて業界からどんどん提案がなされる必要があります。ソーシャルビジネスに関しては、コンペの提案に入れていませんが、実は某企業と現在そのような仕組みができないか、考えているところです。そういうソーシャルビジネスと現場の自治会さんや地元のNPOさんとかと、コラボレーションして、ビジネスも動き雇用も生まれるといいですね。雇用は、やはりものすごく大事ですよ。雇用が生まれるという仕組みを実現しないと、10年も持たないのではというくらい、僕は危機感を持っています。

江川 ありがとうございます。このコンペが今後どうなっていくかという、作品集を作ります。審査員

全員がそれぞれに対して意見があるとするば、それを全部公表していきます。その作品集は関西だけかどうかはまだわかりませんが、できれば、同じような問題をお悩みの方々のところに配布していこうと。社会的な活動として当然の事だと思っていますし、ご覧になったいろんな人が「こう言うアイデアおもしろいから一緒にやろうよ」と言う話が皆さんのところに来れば良いなという風に思っていますし、少しでもいろんな事に繋がっていけばという風に思います。

コンペですので、それぞれの審査員が自分が考えている再編イメージにとってこれだと言う事で選ばせて頂くのは、どれがいいとかどれが悪いとか誤解とかって言うのは、多分みんなわかった上で自分はこう評価しようということになると思います。ただ、最優秀になったからできるとか最優秀ではなかったからできないとかそういう話では無いと思いますし、現実に河内長野市さんがこれをやりたいと思ってらっしゃるものに河内長野市長賞をあげるのか知りませんが、そういうような事で2回目の点数をつけたいと思います。もう一度3点が最高点で加点という事でよろしいですか。

江川 それでは審査委員の講評ということで、全体を通してご感想でもなんでも。

角野 本当にどうもありがとうございました。ずいぶんいろいろと勉強させていただきました。このまま審査員と応募者が入れ替わっていたらどうなっていたのかなと（笑）ヒヤヒヤ話を聞いていました。それでやはり審査員の方々もおっしゃっているようにどういう立ち位置でこの提案を読み取るべきなのか、どういう風にしていくべきなのか、ずいぶん悩んだところはあるんですが、私は逆に触れることを辞めてですね、一

つの住宅団地の高齢化してどんどんと人口が減っていった、特に関西のこの場所でどう生き残らせるかと言った時にいろんな意味での普通の街にしていくという事が本当は重要だと思っています。団地という特徴を活かしながらも如何に普通のまちで、しかも周囲から憧れられる、あの街に行ってみたい、住んでみたいと思われるレベルの普通のまち、普通に暮らせるにまちにしていきたい。そのためには今の持っておられる資源を徹底的に使いながら用途、住まいの混住、そして広域の中でのポジショニングを明快にしていくということについて、改めて重要だという事を確認させて頂きました。ただ問題はそのプロセス、戦略、戦術はまだまだ色々考える必要がありますし、ケースバイケースでそれぞれの場所に個別解を求めているかといけないなと思いました。どうもありがとうございました。

榊井 本日はご苦労様でした。すばらしい提案を頂きましてこれから市の行政に活かしていけるところは活かしていきたいなと思っています。それと審査員の皆様の意見も聞かせて頂きまして非常に参考になりました。今日私だけではなくて市の人間が何人か来ております。聞かせて頂いた事を参考にこれからがんばっていこうと思います。本日はどうもありがとうございました。

飯田 僕も大学院の授業で団地を取り上げて一年間やっておりましたし、やっぱり戦後作られたある意味では一つの住居ビジョンというのが実現した領域というのが日本中にあるわけですが、それがかなりある意味では必要としているし、ある意味では非常に豊かになっているという。実際の団地を見ていくと、とても矛盾したメッセージがあるように思うんですね。良い所は延ばしてあげたいし、悪いところには手を

かけるといところでうまく行けばそれはそれでいいと思うんですけれども、実はそれがなかなか難しいところがある。特にハードの問題として考えると、40、50年経った建築というのはどうしても不利なわけですね、その状況も含めて、例えば一方ではランドスケープが非常に豊かになっているというのもありまして、その当時作られたアイデアに固執するんじゃないくて、これからの時代にどうなのかというすごくジャンプしたアイデアがどうしたって要るんじゃないかと僕は思います。そのときに団地の中だけで考えてはダメで、例えば、先ほどからこの地域がどういう地域なのかというような事をもう一回考えながらこの魅力をどういう風に延ばしていくかという事を考えていくんだろかなという風に思います。実際、僕もある団地から相談を受けた事があって、今日は非常にいろんな事が参考になりましたけれども、建築の問題としてどう考えるべきなのかという事もありますのでその辺は僕自身の課題としても持ち帰りたいと思いました。どうもありがとうございます。

忽那 私は環境マネジメント、コミュニティデザインの話を変えたいと思いますが、住民の方々に任せるといってコミュニティを再生していくというのはもう当然の話なので、そのやり方というのを開発しないといけないなと思っています。実際、我々住宅以外にもいろんな公園、河川、いろんなまち全体の仕組みとしてコミュニティ作りをやっていいますが、責任を持たない市民がどれだけいるかという話がありますので、任せたらそれで終わりやろうという話では絶対にはないと思います。

行政の方もビビり過ぎやと思います。ちょっとぐらい失敗するような事を受け入れないと次の社会は来ないので。今の全員の話を聞いて

と、僕らも慎重になりすぎてると、住民だけじゃわからないから専門家を入れて、専門家に任せたら何かかわからへんから自由に入れたら何か変な事がおこる、というようなそんな事言って、横に住む人たちが全然違う人が住んでるような状況の中、そこでコミュニティが育まれていくって言う様なことは、もうすこし大胆にいろんなチャレンジしていく場という意味での住宅というのを、住宅そのものではダメだったりする事も、住宅の中って言うともたプライバシーの問題もあったりするので少し外を使いこなしたり、周りの自然と関係づけながらテーマ性で乗り込む人たちは仲良くやってるよねという事でやることから住宅の直近の部分までシェアとかという事を含めた提案を作っていくとか、いろんな手法があると思いますので試して頂ければ良いなど。

もう一つ、単年度で、あるいは設計と実施設計と管理を全部分ける仕組みを、如何につなげていくかというのが次の話だと思うので、最初に関わって全然責任のとれないところで性能発注していて、行政・URが責任を取るのかと言われたら誰も責任を取らないわけですよね。それはちゃんとコンペとかプロポーザルとか責任を持つ体制、我々が住民と関わってるときも、最低3年は関わらないと住民とコミュニティは作れません、3年で作れたら奇跡みたいなもので、そういうもう少し設計する事とコミュニティづくりと一緒に発注する仕組みを作っていくとか、最後まで責任を持つという事をお任せするというような、それも市民にお任せするという仕組みを我々はいっぱい作っていますのでどんどん事例として作れたらいいなと思っています。ありがとうございます。

星田 皆さま、本日はありがとうございました。本来ならたっぷりと対

話応答をしたい所ですが、審査員という立場で一方向の物言いになることをお許し頂きたいと思います。一般に実際の現場では、計画当事者間の礼儀を図るあまり地域や住民への礼儀が後回しになる事も見られますが、今日はぜひ専門家どうし忌憚なく事をやりとりしたいと思いました。宜しければこれを一つの出会いとしてお友達になって頂き(笑)、議論したテーマを続けていけると幸いなのですが。このコンペを通して、団地再生を一生懸命やろうという方々がたくさんおられる事がわかり、とても勇気を頂きました。

鳴海 先ほど言えなかった事を2つ。団地を再生する事と直接の関係はないかもしれないけれども、災害の仮設の話はとても重要で、我々阪神淡路大震災のときもいろいろなものを提案したけど、そういうのはお役所の管轄の問題がまずあって、作らないといけないという風に法律で決まっている。それがそもそも変だとみんな思ってるんですけれども、こういうことを考えたのはなかなか面白いアイデアだと思うので、団地そのものがターゲットでは無いかもしれないけれど、少し深掘りすると実際使われる可能性がある。今いろんな事が実際に考えられているんですよ。実際今回の東北の災害時でも各自治体はみんな受け入れてるでしょ。で、受け入れているのはみんな公営住宅に入ってるわけですよ。空き家に入ってる可能性があるから、実際にそれをやっている可能性があるのもその辺を少し調べてもっと積極的に提案して団地の問題を考える上で一つの武器にできる可能性があるのも、是非深掘りして考えて欲しいなという風に思いました。

それからもう一つは階段室を変えたいという。まあ昔から階段室というのは良くないというような批判があって、外国でもそうらしいんですよ。ところがなかなか簡単には

変えさせてくれないので…、どっかで一カ所やったら面白いと思ってやり出すところが出てくるかもしれない。それが一発でも変わると、できるとこんなに面白くなるんだという事が証明できるでしょ。だからもうちょっとしつこく提案してどこかで一発でもいいから実現すると面白いなど。総合得点とは別の期待ですけど（笑）。

江川 ありがとうございます。実は私もそのお二方とお話をしたいなと思っていて、まず階段は建築的な提案をする以上もう少しちゃんと調べて実現可能な提案をいろんな人たちとディスカッションしながらやってほしいというのが一つ。一番できやすいところだと僕も思っていて、むしろどうやってそれを作っていくのかという事が問題で、お金はURさんが出してください、誰かが設計しますって言うんじゃ、つまらない。その仕組みの提案があると、例えばどこかの学校で木造で別に階段作ったり、そういうプロセスそのものが何か風景になるとかそういうものがあるともっといいかなという感じがしまして、ずっとこれからも本当に考え続けてほしいなど、僕は思いました。

それから復興住宅もですね、一階にお風呂と言ってますけれども、あれ描いてある絵は気に入らなかったけれども、ちゃんと構造を考えて提案してくれると面白いお風呂が実はできるんですよ。実は団地の一階というのはコンクリートでできていなくて木造でできているので、ただ逆梁とか全部あるんでね、そういうの

を活かして本当に今の構造の中で露天風呂なんかがある風が通り抜けるようなお風呂は実はできるなと思って僕は見ていたんですよ。あの頃の団地のお風呂ってみんな狭いから。ああいうところに風が抜けているようなお風呂がいっぱいあるなんてのはとても良いなと思いました。そのことに関しては、意外にリアリティあるかなと。もし可能性があるなら一緒にやりませんか？（笑）僕たちが活動しているところでそういう提案してみても良いかなというぐらいに思いました。とても楽しかったです。

それで今問題にしているのは古い団地は建て替えという手法が取り入れられて、いくつかやってきた訳だけれども、これからはまだ使える訳だしいろんな意味もあってストックを活用しながらやらなきゃいけないっていう時代ですよ。これは難しいですよ。建替えれば制度も全部変えられるけれども、そこをみんな考えていく。外国なんかですねドラスティックに古いものを残しながら、いろんな事をやっている事例が多いけれども、日本の場合は日本のやり方というもので少し変えていかなければいけないと思うんですね。その時に制度などの簡単にでは無いところで変える事はドラスティックに大胆にやったらいいと思うけれども、山のようにある住宅を全部対象にする訳なので、できれば物事は小さくできるところから解いていく。もちろん混ぜるという発想はとても重要だと思うので。私はいつも「小さく解く、混ぜて解く」と言うんですけども、やっぱりそう

いうのが無いとなかなか変わっていかないんじゃないかなという風に思っています。

何れにしてもこのコンペをやってですね、賞金も無いこんなコンペに誰が応募してくれるんだみたいなこともですね、色々議論した事もありましたけれどもとても皆さんの真摯な提案を頂きまして本当にありがとうございました。是非このエネルギーを継続させて社会につなげていきたいという風に私たちは思いますので、また是非協力をお願いする事になるかと思いますがよろしくお願い致します。

それから参考までに私たちの提案というのも展示させていただいてまして、今日は議論しませんけれども、今後シンポジウムなどでもですねそういうのを含めて皆さんと一緒にディスカッションしていきたいなと思います。ちなみに私たちの提案は、みんななんだけれども人それぞれという提案で集合住宅団地に住んでいる人たちが全部40平方メートルぐらいの専用庭が実は持てる、そういう事をきっかけに集約した駐車場をなくすとかですね、野菜を作ろうと思ったら作れるとか、4階に住んでる子が友達を読んできてキャンプができるとか、そういう事の提案になっていますのでまた是非ディスカッションできればと思っています。

ありがとうございました。

関連リーフレット：157

『団地再編 COMPETITION2013 パネルディスカッションによる二次公開審査』

作成：KSDP 団地再編プロジェクト

とりまとめ：宮崎 篤徳（関西大学 先端科学技術推進機構）

※：本稿は、「団地再編 COMPETITION2013 作品集、KSDP 団地再編プロジェクト、2014 年、pp.55-58」の再録である。

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2015 年 3 月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel：06-6368-1111（内線：6720）

URL：<http://ksdp.jimdo.com/>